

日本放送協会 御中

宇喜多直家・宇喜多秀家をはじめとする
「戦国 宇喜多家」を主人公とした大河ドラマ実現に向けて

令和5年12月13日

戦国 宇喜多家を顕彰する会～大河ドラマ誘致を目指して～

要 望 書

宇喜多直家・秀家をはじめとする「戦国 宇喜多家」は動乱の時代に現れ、一閃の光芒を放った後、表舞台から姿を消しました。

西暦1600年のあの日から始まった敗者の歴史。

しかし、そこには語られていない物語とたくさんの魅力が詰まっています。

ゼロから独力で飛躍し超大国と渡りあった男

宇喜多直家は、流浪の境遇から身を立て、常識にとらわれない戦略で領地を拡げ、経済を活性化し、一代で50万石の大名に至りました。後年は病と闘いながら、織田・毛利の超大国と渡り合いました。これは、織田家という翼に乗った豊臣秀吉や、親子で大成した斎藤道三にもできなかった功績です。

女城主として一家を守った妻

直家逝去後、妻・おふくの方は、秀吉に対しての影響力を発揮して毛利氏に一步も引かず、幼き秀家と家臣団をまとめ上げて領地を守り抜きました。

国内外で戦い抜き、徳川と唯一刃を交えた謎多き五大老

直家の子・秀家は、全国各地で秀吉に従軍し、大陸出兵でも総大将として活躍しました。そして徳川家康と対峙し、西軍最大兵力で出陣した関ヶ原では、豊臣に忠義を尽くし、大将格として石田三成らとともに奮戦しました。

いわゆる五大老で大河ドラマになっていないのは秀家だけであり、また、西軍視点の大河ドラマや、滅んだ大名家のドラマはほぼありません。歴史研究の進んだ今こそ描ける敗者の物語。そんな新しさがあります。

夫とその子どもたちを支え続けた愛

秀家の妻・豪姫は、八丈島へ配流となった夫を案じ続け、彼女の逝去後も秀家の子孫のため、実家・前田家からの仕送りは明治維新时期まで及びました。

東京都島しょ部を含む全国が舞台

この物語の舞台は、戦国期の大河ドラマとしてあまり採り上げていない岡山や四国、九州のほか、金沢、京都、大阪、岐阜など全国に拡がり、特に八丈島など東京都島しょ部にスポットが当たる企画となります。なお、八丈島で残りの生を全うした秀家は、関ヶ原を戦った武将の中で最も長く生きており、戦の勝者ではなく寿命の勝者という一つの価値観の提示も画期的と考えます。

キリシタンの武将や姫たちが登場

宇喜多家には、商才を見出された小西行長、家康が恐れた明石全登、豪姫などキリシタンゆかりの人物が多く、戦国期のキリシタン文化を描く貴重な題材であり、国際色漂う作品になると考えます。

埋もれた歴史に目を向けると、いまだかつて知られざる物語があり、また、困苦に生き、守る者のために生き、恩義に生き、愛に生きた人の生きざまがあります。この「戦国 宇喜多家」の大河ドラマ実現に向け、格別のご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年12月13日

戦国 宇喜多家を顕彰する会～大河ドラマ誘致を目指して～

会長 大森 雅夫



なぜ宇喜多直家・秀家で大河ドラマなのか

「戦国 宇喜多家」ならではのポイントと人物伝

推し

戦国 宇喜多家を顕彰する会～大河ドラマ誘致を目指して～

推し

「戦国 宇喜多家」ならではのポイント

①【宇喜多直家】ゼロからの飛躍と超大国との対峙

後世の儒教的価値観から悪人の烙印を押された直家。しかし、それは本当の姿か？ゼロから独力で未来を切り拓き、経済を活性化して、一代で50万石の大名にのし上がり、織田と毛利の超大国を相手に立ち回った人物は他にはいない。

②【おふくの方】女城主として子と領地を守る

直家の妻・おふくの方は、毛利との国境確定交渉において秀吉に対しての影響力を発揮し、幼き秀家と家臣団を守り抜いたとされる。

③【宇喜多秀家】大河になっていない最後の五大老、西軍の大將格

最愛の娘・豪姫を託されるほど秀吉に見込まれた秀家は、国内外の戦で活躍。西軍最大兵力で唯一徳川と矛を交えた五大老であり、唯一大河ドラマになっていない「謎の」五大老である。西軍視点のドラマはほぼなく、今こそ秀家を通じて西軍に光を当てる時である。

④【豪姫】夫と子孫を支え続けた愛は明治まで続く

秀家の妻・豪姫は、八丈島の夫を生涯案じ続け、逝去後も、秀家の子孫のために実家・前田家からの仕送りは明治維新时期まで続いた。

⑤東京都島しょ部を含む全国が舞台。キリシタン文化も描く

物語の舞台は、戦国期の大河ドラマとしてあまり採り上げていない岡山や四国、九州のほか、金沢、岐阜、関西など全国に拡がり、特に八丈島など東京都島しょ部にスポットが当たる企画となる。また、「戦国 宇喜多家」は、小西行長、明石全登、そして豪姫などの戦国期のキリシタン文化を描く貴重な題材であり、国際色漂う作品になる。



光珍寺旧蔵

400年以上にわたって悪名を背負わされた英傑 宇喜多直家

1529年に砥石城(岡山県瀬戸内市)に生まれたとされ、6歳の時に祖父能家が島村盛貫に攻められ、以後、備後鞆、備前福岡などを転々とする人生が始まった。この間に父は病没し、直家は商家に身を寄せる中で他の戦国大名にない経済感覚を培ったとされる。

1543年頃、浦上宗景方として功を上げ、乙子城主に抜擢。

1559年頃、舅の中山勝政を浦上宗景の指示で謀殺し、祖父の領地を奪回。同時に島村盛貫を謀殺。以後亀山城(沼城)を居に領地拡張に努めた。

1566年頃、三村家親を日本史上初とされる鉄砲で暗殺し、翌年、その子・元親を寡兵で撃退したという。さらに松田氏、金光宗高も殺して岡山城(石山の城)を手に入れ、大改修を施して1573年前後に入城。ここに城下町・岡山の歴史が始まった。

1575年、浦上宗景を追放し、備前、美作南部、播磨西部を領有。織田信長の命を受け中国地方に進攻した羽柴秀吉に対抗して毛利氏と結ぶが、のち信長に帰属。毛利勢と激しい攻防を繰り返す中、1582年(または1581年)に病没した。

本当に悪だったのか？

直家は「正攻法よりも権謀術数を多用した」とされ、斉藤道三、松永久秀と並ぶ戦国三大梟雄の一人に数えられる。

しかし、宇喜多家資料の多くは滅却されており、江戸期の儒教的価値観に基づく資料等により、今に続く烙印が押された面がある。

そもそも直家が多用したとされる謀略の類は、戦国においては世の常だった。むしろ直家の特筆すべき点は、大きな戦を避け、合理的戦略で家臣や領民を守った点であり、家臣に対しては、ともに荒地を耕し、食糧不足の折にはともに絶食し、労には報い、手を下すこともなかったという。

そして一代で備前の覇者となり、織田と毛利のはざままで苦心しながらも巧みな外交で領地を次代につないだ。

また、商業や水運がもたらす豊かさを認識しており、吉井川・旭川の二大河川を押さえ、平地に城を築いて商人を呼び寄せ、城下町の形成に着手した。これは信長の安土城築城よりも前の出来事であり、非常に先見的であったと言える。

直家の戒名は「涼雲院天徳星友居士」という。定着しているイメージとは程遠いこの名こそ、彼の真実に近づく一つの材料になるかもしれない。



忠義に生き、波乱の人生を歩んだ五大老 宇喜多秀家

1572年に直家とおふくの方の子として誕生。1582年、直家死去により家督を相続し、羽柴秀吉の高松城水攻めに派兵。1585年以降は四国攻め、九州攻め等に出陣し、秀吉の天下獲りを支えた。また、前田利家の娘であり秀吉の養女でもある豪姫を妻とした。1592年の文禄の役では総大将をつとめ、この時、戦地から家臣に向けて城下町整備の方針を書き送っており、城下町づくりに励んだ。1597年頃には金箔瓦を使った岡山城天守が完成。同年、慶長の役に出陣。また、豊臣政権下では従三位権中納言に昇進し、後世、五大老とされる国政を担った大名の一人となった。

しかし、関ヶ原の戦い直前に宇喜多騒動が発生し、昔からの有力家臣が離れてしまう。そして1600年の関ヶ原の戦いでは、様子見をしたり東軍につく武将も出る中で、西軍の最大兵力で出陣し、大将格として奮戦するも敗退。逃走ののち現在の鹿児島県垂水市に隠れるも、1606年に八丈島へ配流となった。以後、本土に戻ることなく1655年に死去した。

単なる二代目大名だったのか？

秀家は、偉大なる父の跡を継ぎ、若くして昇進を果たしたものの、敗者となり領地を失った二代目という印象を持つ人が多い。しかし、秀吉の天下平定の戦には常に従軍し、大陸出兵でも総大将として活躍するなど、武人や指揮官としての実力も散見できる。また、妻となった豪姫は秀吉最愛の娘とも言われ、その夫として秀家を選んだ秀吉の人物眼からも、秀家の人となりが見えてくる。さらに秀家は、山陽道の付け替えや酒造などの産業集積、大規模な干拓の実施など、城下町の拡張や商業・農業振興に努め、岡山を発展させた。ただ、検地に伴う領国経営の変革が宇喜多騒動に繋がったとされ、宇喜多家の弱体化を図りたい徳川家康に付け込まれた面がある。経験不足だった点は否めず、最終的には石田三成や大谷吉継らとともに秀吉へ貫いた忠義が仇になってしまった。

八丈島で過ごした秀家は、関ヶ原に参戦した大名の誰よりも長生きしたが、豪姫との再会は叶わなかった。現在、島の海岸には、秀家と豪姫が仲睦まじく並ぶ座像が設置されており、命日には鎮魂祭が営まれるなど、今も島民から愛されている。



幼い秀家と宇喜多家を守った女城主 おふくの方(円融院)

戦で滅んだ三浦氏の娘とされ、宇喜多直家の妻となった。直家にとって政治的メリットもない結婚であり、当時珍しい恋愛婚との向きもある。宇喜多秀家の母とされ、直家逝去後、わずか9歳で跡を継ぐことになった秀家と求心力を失った宇喜多家臣団をまとめるとともに、羽柴秀吉の力を背景に周辺の武将にも睨みをきかせるなど、女城主に近い時期があったとされる。それを物語る資料も残っている。備中高松城水攻めの後、宇喜多・羽柴方と毛利方の国境を定める交渉において、毛利方交渉役の安国寺惠瓊は、「(秀吉方交渉役の)黒田官兵衛、蜂須賀正勝が例え了承しても、秀家の母が秀吉に手紙を書いて直訴したら、決定が覆ってしまう」という書状を国元に送っている。おふくの方の秀吉への影響力は極めて強いと信じられていたようであり、夫の所領を守る強い決意が伺えるともいえよう。

明治維新まで続いた夫と子孫への思い 豪姫(樹正院)



前田利家の娘、羽柴秀吉の養女。秀吉と正室のねねに大変愛された。豪姫が夫・宇喜多秀家の子を出産後、床に臥せた際に狐が取り憑いたせいだと言われ、激怒した秀吉は、稲荷の総本宮・伏見稲荷大社に対し、「取り憑いた狐を退散させよ。さもなくば国中で狐狩りをして狐族を滅ぼすぞ」と命令書を出している。秀吉からは「男なら関白の職を持たせるのに、女性なので仕方がない」と言われるほどの器量だったとされ、その夫に見込まれたのが秀家だった。関ヶ原の戦いに敗れ、のちに八丈島へ配流となった秀家に対しては、母芳春院(おまつの方)らとともに米、金、衣類、薬などの生活物資を送り、その生活を支えた。また、自身は再婚することなく、一途に夫と息子たちの身を案じ続けたと言われている。豪姫の死後もその思いは受け継がれ、前田家からの仕送りは秀家の子々孫々へ及び、宇喜多家が赦免される明治維新时期まで続いた。

資料2 「宇喜多秀家・豪姫」 関連地図 1572~1655



